

◆インターネット活用教育実践コンクール実行委員会賞◆

<学校教育部門>

『日本人は本当に他人からの視線に弱いのだろうか？』
～海外日本人学校とのメール交換による調べ学習～

香川県香川郡塩江町立塩江中学校

URL: <http://www.niji.jp/school/nemunoki/>

実践のねらい

インタ-ネット活用による、よりリアルな「国際理解教育」の契機のために。

インタ-ネット活用による、よりグローバルな「価値観」の発見のために。

インタ-ネット活用による、よりフレンドリーな「コミュニケーション能力」の育成のために。

ねらい について

「外国の人は、本当に視線に強いのかなあ？」

出発点は、ある生徒の呟きだった。2年生の教科書(東京書籍)『新しい国語2』に「視線を避ける文化」という教材がある。総じて外国人が他者の視線に強いのに比べ、日本人は他者と視線を合わせることを苦手としている。そのことを、筆者のイタリア滞在経験から論じた文章である。

「生徒の呟きを生徒自身の手で実際に確認させたい。」そう考えた時、インタ-ネットの活用こそが、最も迅速かつ有効な手段であることに気付いた。それによって、生徒たちは活字の上だけの知識から飛び出して、よりリアルに異文化を体感することができる。国際理解教育は、そこから始まるはずである。

ねらい について

過疎化の進む地域にある本校生徒は、日常生活において外国人と接する機会が殆どない。また、交友関係も固定化しており、多様な価値観に触れることも難しい。

そんな彼らが、数多くの海外日本人学校とメール交換により、さまざまな地域や文化を知り、その価値観を肌で学ぶことは、多感な発達段階において極めて重要である。同時に、山間の僻地であってもインターネットを活用すれば、地理的なハンデを容易に克服することも実感させたいと考えた。

ねらい について

教材では、我が国の民俗学の先駆である柳田国男のユニークな『にらめっくら(にらめっこ)起源説』が引用されている。それによると「私たちの祖先は、仲間うちでは平気だが、共同体の外に出ると他者の視線を意識してしまい、見られるだけの存在となってしまう。そこで、視線強化の為に《にらめっくら》が生まれた。」というのである。

実は、本校生徒にも全く同じ現象が見受けられる。このような地域特性を解消し、豊かで開かれたコミュニケーション能力を身につけさせることは、本校の教職員にとって共通の課題である。海外の未知の人々とのメールのやり取りは、その第一歩として意義深いも

のがあるに違いない。

特徴・工夫・努力した点

ベア学習の導入と送信先の限定

ISDN回線の問題もあって、一斉にインターネットが利用できるように、ベアによる学習形態を採用した。しかも、送信できるのは3箇所までと限定した。

しかし、その真の目的は、2人が関心を持った国や地域について意見を交換したり、メールの文面について相談したりすることで、最も身近な相手とのコミュニケーションでさえ難しいことを認識させることにあった。また、幼い頃から一緒に育ち、よく知っているつもりの級友の意外な一面を発見することを期待した。つまり、海外の未知なる方との「大きなコミュニケーション」成立には、パートナーとの「小さなコミュニケーション」成立が不可欠となる一種のスパイラルが構築されることを意図したものである。

パソコン室の模様替え

また、ベアで活発な議論がなされるためには、パソコン室の雰囲気も重要であると考え、長机とホワイトボードを運びこんだ。これらを自由に使うことで、それまでの「肩並び型」から「向き合い型」への転換を試みた。

このスタイルは功を奏し、パソコン室に明るく和やかな空気が生まれた。現在では、別教材でも3～4人のグループ学習形態へと発展させ、活発な意見交換がなされている。

送信先の選定及び調整

実践にあたって最初の壁は送信先であった。本来なら外国人の方と直接やりとりするのが理想だが、生徒の語学力の問題もあって、断念せざるを得なかった。そこで、迷惑とは思いつつも、送信先を海外日本人学校に絞ることにした。

また、ベア同士の送信先が重複しないように、NGPのメーリングリストに登録したり東京書籍のリンクを検索したりして、多くの候補を準備した。

メール管理

次に配慮したのは、生徒のメールを送信前にサーバーに保存させることであった。これによって、メール内容が適切かどうかを教師が判断できるようにし、必要に応じてベアに修正や訂正を促した。なお、送信は教師が一括して行い、最初の送信には教師作成の依頼文を添付する形とした。

達成感の援助

1週間を経過しても返事が来ないベアには、新規の

送信先を追加することを基本方針とした。もしも、その段階で3箇所全てから返事の来なかったペアには、教師の個人的な繋がりやNGPのメーリングリストを活用することにした。

これによって、すべてのペアが返事を受け取れるはずである。ただし、このような教師主導のものは、時として生徒の成就感・達成感を阻害する可能性があることを忘れてはならない。苦勞するほど勝ち取った時の喜びは大きいものである。このことを学ばせるのも教師の仕事であろう。

実践内容

(1) 送信先の選定

ペアを組み、インターネット検索によって送信したい学校を各自2校ずつ選ぶ。
候補となった全4校について意見交換して、3校に絞り込む。

全てのペアのデータシートを集め、学校の重複や地域の偏りを調整する。【教師】
確定した発信先について、インターネットで再び下調べを行う。

(2) 送信 着信

メールの下書きを2人で協力して考え、データシートに入力する。
教師のアドバイスを受け修正したものを、サーバーの【最初のメール原稿フォルダ】に保存する。
【送・着信表】に送信先のデータを貼り付け、着信を待つ。
着信メールは2部プリントアウトして、1部を「ペアでの検討用」として、もう1部はホワイトボードに貼って、他のペアの参考資料とする。

実践結果

(1) ペアで話し合い、感想をまとめる



- (2) 文化祭において展示スペースを確保して、保護者や他学年にも公開した。
- (3) 視線に関するアンケートを行い、メール結果と総合した「視線の新聞」を発行した。
- (4) 集計の結果は以下の通りである。(初回のみ対象)
送信メール総数 52通 (16ペアが各3通ずつ、内4ペアは1通ずつ追加)

返信メール総数 31通

返信地域(国・都市) 16箇所

アジア(中国、韓国、ベトナム、インドネシア、マレーシア)

アメリカ(デトロイト、NY、サンフランシスコ、オハイオ、ハワイ)

中南米(パナマ、チリ、コロンビア)

ヨーロッパ(オランダ、スペイン、ロシア)

アフリカ・中近東(パハレーン)

「視線」についての主な回答

日本人は「眼が言葉よりも言う」といいますが文化が混在しているヨーロッパでは、ものを言わなくてはものが通じないのが普通です。ですから、視線があったと幸いとばかり自分の考えをしゃべりまくります。

学校内では、生徒同士で視線を避けることはありません。学校を出ると、パナマの人達(特に年輩の方々は、視線が合うと、Hola!と笑顔で気軽にあいさつしてくれます。

パハレーンには、パハレーン人のほかにパキスタンやバングラディシュ、インドなどからの外国人労働者がたくさんいます。街中を歩くと、彼らの視線を強く感じます。確かに日本人の数は200人程度なので、めずらしいことには変わりないのですが…。しかし、彼らと目が合うと決まって彼らは、ほほえみかけてきます。こちらの方が照れてしまうくらいです。

私たち日本人はここ北京でも、北京に住む日本人どうしやはり気を遣い合っています。外国人に対しては(中国人や欧米人など)あまりかっこわるいとか、見られていると言う感覚はありません。外国に来てまでも、日本人は日本人同士の視線を気にするのでしょうか? 悲しいことです。中国には40を越える民族が助け合いながら住んでいます。それぞれの価値観も違います。ということで、お互いに認め合い、言いたいことは言うという感じ。また、人なつこく、初めてあった人でも「朋友」という言葉で、親しみやすく接してくれます。

アメリカ人は、根本的には、視線を恐れないと思います。治安がとても悪い地域は、また少し事情が違ってしまうでしょうが安全な中流住宅地の人は恐れませんが、目が合うと、にっこりと挨拶してくれます。アメリカ人は人目を気にしませんし、人が何をしても(迷惑な事であれば)気にしません。自分がやりたい事をやり、着たいものを着ています。その代わりに、社会のルールはきっちりと守ります。だから好きなように生活していても、廻りと衝突したりしません。人ごみを歩くにも、皆きちんと廻りに気を遣っています。自分が良ければ、人のことなど知ったことでない日本とは、えらい違いです。だからとても生活し易いです。アメリカ人は、人の目は恐れなくても、神の目は恐れる(自分の良心に恥じる行いはしない)民族でしょう。

考察(今後の課題)

(1) [2. のねらい] 3点についての分析

《 インタ - ネット活用による、よりリアルな「国際理解教育」の契機のために》

何より驚いたのは、返信の大半が「日本人は視線に弱い、外国人は自己主張がきちんとできる。」という筆者の主張を裏付けるものだったことである。正直、事前の予想では、日本人のように「シャイな人々（はにかみや）」が、少なからず世界には存在するのではないかと（私自身も含め）考えていたが、その予想は見事に覆されてしまった。

しかし、これでいいのだと思う。返事を下さった多くの方が感じて記されたことこそが「リアルな国際理解教育」そのものなのだから。

また、瓢箪から駒ではあったが、殆どが日本人学校の関係者からの返信であったので、筆者や自分の立場と置き換えることも容易で、生徒たちは返信の内容を素直に受け入れることができていた。もしも、外国人からの返信であれば、人種・国籍・民族の違いということで片付けてしまっていたかもしれないので、これはうれしい誤算であった。

《 インタ - ネット活用による、よりグローバルな「価値観」の発見のために》

私はこう考えていた。「自分と異なる価値観を受け入れることは、さまざまな価値観を認識しているはずの大人にとっても、決して容易いことではない。ましてや、多様な価値観に触れる機会もない本校生徒にとっては尚更である。」と。

しかし、今回の実践を通して、その考えがいかに誤ったものであったかを痛感した。生徒たちの異文化を異文化として認め、受け入れる柔軟さを軽視していたのは、私自身であった。その時、かつて読んだ国際ジャーナリストの言葉が想起された。

「異文化の評価を、軽々しく自分の物差しで下してはならない。」まさに、グローバルな生徒たちに教えられた瞬間だった。

また、地理的なハンデの件であるが、結論から言えば、一定の達成はあったと思われる。送信後、早ければ翌日には、詳細なご返事をいただくことも多く、生徒たちは驚きもしていたし、感激もしていた。自分たちが、紛れもなく地球という大きな社会の一員だ、ということを実感できた意義は大きいといえる。

《 インタ - ネット活用による、よりフレンドリーな「コミュニケーション能力」の育成のために》

何度か言及しているが、返信の多くが詳細なものであった。その返信の根底にあったものは、海外生活で培われた「友好の心」だったに違いない。

今回の実践は、同県出身者から、土日みの補習校から、学校だよりを見ただけの保護者から、生徒全員にアンケートして下さった先生から、NGPのログを見た方からと、幸せなメールの数々によって成り立ったものである。つまり、生徒たちも私も「フレンドリーなコミュニケーション能力」の恩恵に浴した当事者なのである。

また、ペア学習の効果は予想以上であった。偶然

(必然?)にも返信の多くが、「視線を合わす = (笑顔 = あいさつ) = コミュニケーションの基本」という図式の中で成立しており、その影響もあって、パートナーに対する態度もずいぶん向上してきたように思う。

(2) 補足及び今後の課題

失敗する経験の重要性

意外に思われるかもしれないが、過疎地域は町ぐるみで生徒に大切に扱っている。そのため、一部の生徒は、質問メールには必ず返事が来るものと思いきこんでいた。

しかし、日本人学校は忙しく、返事のない場合も多かった。小学校時代から、このような体験学習においても失敗する経験を回避し(させられ)てきた生徒たちには、社会というものを肌で学んだ貴重な体験となった。人は失敗から多くを学ぶものである。今後も失敗というリスクに懼ることなく、さまざまな実践に挑戦させたいと思う。

新しいパソコン室のあり方

今回の実践で改めて浮き彫りにされたのが、今やパソコン室はパソコンがあるだけでは時代遅れだということである。今後の総合学習や調べ学習に対応するためにも「フリースペースの確保」や「四つ葉クローバー型のパソコン配置」さらには「デジカメ、スキャナー、プロジェクター、長テーブル、ホワイトボード、関連書籍を収めた書架など周辺設備の充実」が早急に望まれる。スペースも最低でも今の1.5倍は必要であろう。

そして、これによってコンピュータを活用した学習が、各自が黙々と画面に向かうだけの「没コミュニケーション」学習でなく、グループ(ペア)が活発な意見の飛び交う「汎コミュニケーション」と成りうる確信を得ることができた。

メールに関する課題

ひとつは「マナー」の問題である。本校ではチャットや掲示板への参加は禁止しているが、必要に応じてのメール交換は認めている。しかし、教師間でも意見が分かれており、現段階ではアカウントを取得させず、サーバーから教師が送受信している。時代の推移や生徒の成長を見極め、慎重かつ柔軟に対応したい。

もうひとつはセキュリティ、つまり「ウィルス」の問題である。本校でも8月に「Sircam」によって多くの方々にご迷惑をかけた。ウィルスの殆どがメールを媒介としているらしいことは周知の事実であるが、被害を恐れるあまり使用しないのは本末転倒のような気がする。

(3) 最後に

生徒にとっても私にとっても始めてのメールを使った実践だった。さまざまな苦労もあったが、実践をまとめる頃になると、生徒たちの顔には自信に満ちたものの変貌していた。

その成長が何よりの成果であったと思う。改めてメールを送ってくださった方々に感謝の意を表して終わりとしたい。